第 33 回文化講座

発掘調査速報 2009

【日時】 7 月 25 日（土）午後 1:00 ～ 4:30

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

第 33 回文化講座「発掘調査速報 2009」

平成20年7月25日（土）　午後1時 30 分～4 時 30 分

あいさつ　　沖縄県立埋蔵文化財センター所長 玉栄 直

箕隅原 A 遺跡発掘調査	山本 正昭（1）
具志川島遺跡群発掘調査	片桐 千亜紀（5）
首里城跡発掘調査（銭蔵跡）	仲座 久宜（9）
円覚寺跡発掘調査	仲座 久宜（15）

******* 休 憩 *******

首里城公園発掘調査（中城御殿跡）	上地 博（19）
宮国元島上方古墓群発掘調査	西銘 章（20）
基地内埋蔵文化財分布調査	中山 晋（24）
海軍病院建設予定地内発掘調査	知念 隆博（30）

質疑応答

鏡水箕隅原 A 遺跡発掘調査の概要

調査班　主任　山本　正昭

はじめに

鏡水箕隅原 A 遺跡は那覇市の南西側、那覇空港の東隣に位置しています。周辺の埋め立てが進み、海岸線を遺跡から望むことはできませんが、かつては慶良間諸島の島々のみならず、広く東シナ海を眺望することができました。戦後の著しい開発等によって周辺環境は変化し、現在も那覇空港近辺では大規模な開発工事が行われています。

鏡水箕隅原 A 遺跡の発掘調査は、沖縄西海岸道路「那覇西道路」の那覇空港へ接続するための連絡道路建設に伴いはじまりました。陸上自衛隊那覇基地内に立地していたためにこれまで遺跡の詳細については長らく不明でしたが、今回の発掘調査によって新たな発見がありました。

鏡水箕隅原 A 遺跡周辺の遺跡

鏡水地区（那覇空港周辺）には縄文時代早期から近世・近代にかけて多くの遺跡が分布しています（図1）。ここ近年の発掘調査の成果によって、かつてこの一帯がどのような状況であったのか明らかにされてきています。鏡水地区ではこの鏡水箕隅原 A 遺跡の北隣に、より古い時期にさかのぼる鏡水箕隅原 C 遺跡があります。

鏡水箕隅原 C 遺跡は縄文時代早期から中期、そして貝塚時代後期、グスク時代の頃の遺跡であることが過去の調査によって判明しています。今回の調査で、鏡水箕隅原A遺跡は鏡水箕隅原C遺跡の空白期間にあたる縄文時代後期の遺跡であることが解りました。このことにより、縄文時代中期から縄文時代後期にかけて生活の場所が国場川河口付近から、そのやや南側一帯に移っていることが新たに分かりました。

その後の貝塚時代後期になると再び鏡水箕隅原C遺跡に生活の拠点が戻るのと同時に、更に南側（現在の那覇空港国内線ターミナル付近）にある那崎原遺跡に新たな生活の場を開拓していきます。

那崎原遺跡では農耕に伴う鍬跡や溝跡が確認されていることから、鏡水地区周辺の海岸低地が貝塚時代後期でも最後の時期、すなわち9～10 世紀に耕作地として利用されるようになったことが解ります。

このように鏡水地区の遺跡を見てみると時代によって生活の場が変わっていくのが見えてきます。

平成 20 年の発掘調査概要

平成 20 年は 7 月から発掘調査を行っており、7 月に近世の包含層を、8 月にグスク時代の包含層を、9 月には縄文時代後期の包含層を確認しました。

近世にあたる遺構は鍬跡と素掘りの溝が検出されました。このことから平成 19 年の発掘調査成果と同じように近世は耕作地として土地利用されていたことが判明しました。グスク時代にあたる遺構は焼土面を検出したのみで他に明確な遺構は確認されませんでした。しかし、大量の焼土塊が出土していることからこの時期まで耕作地として土地利用されていた可能性があります。更にその下部から縄文時代の遺物包含層が確認され、伊波式土器、神野式土器、嘉徳式土器（表1）がこの層から出土しました。これらは縄文時代後期に使われた土器であるため、この場所は生活の場として、短期間利用されていたようです。また遺構については150 を超える柱穴が検出され、更に石器（磨石）を廃棄した土坑が 1 基、確認されています。他には石鏃、石斧の完形品も出土しています。

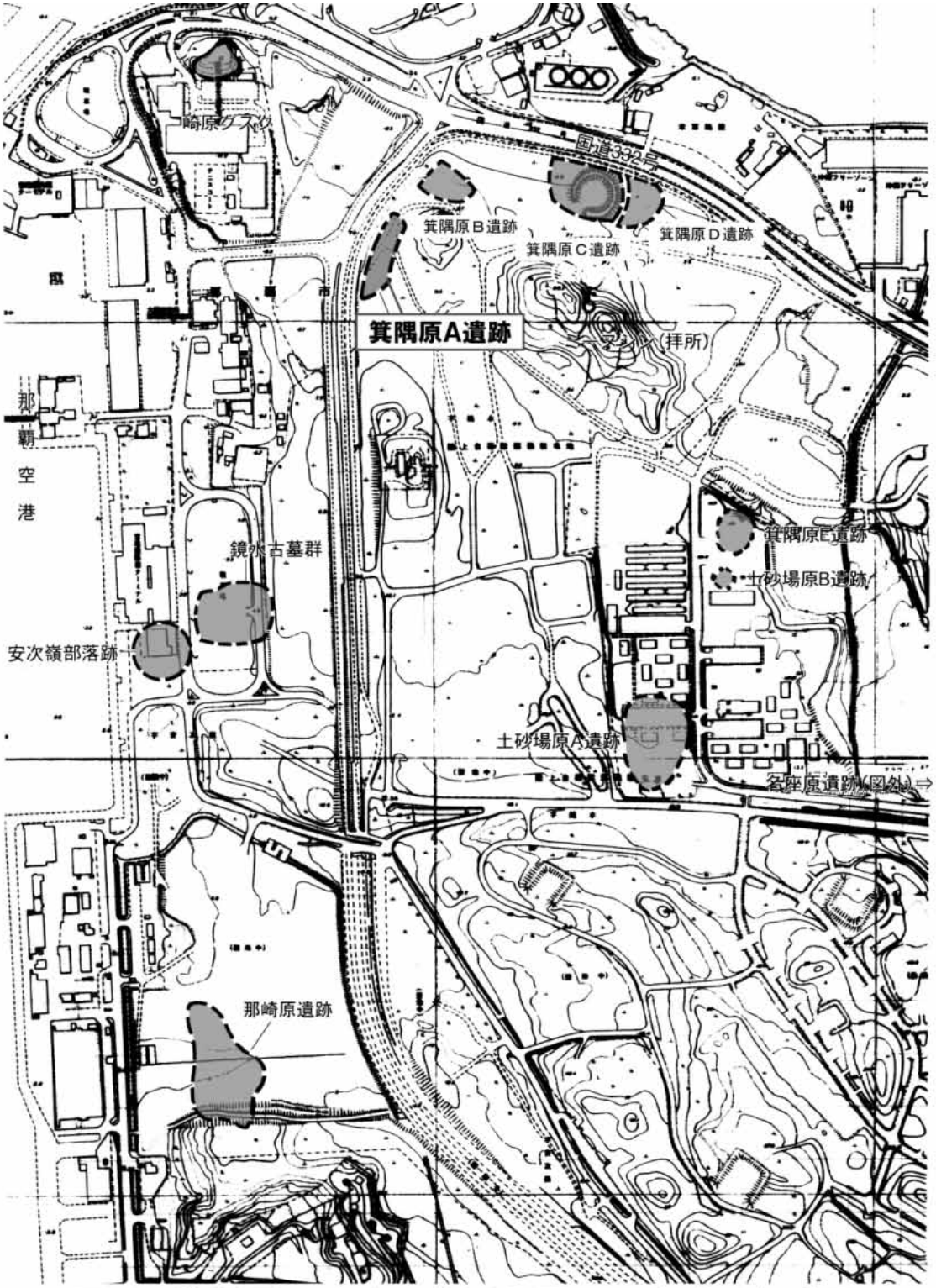


図１　箕隅原Ａ遺跡の位置と周辺の遺跡（概略図）

遺物については現在のところ縄文時代の遺物包含層から出土した縄文土器が最も多く、また、古生期成の石灰岩、頁岩、緑色片岩、緑色岩、砂岩、変輝緑岩、安山岩、チャート、石英そして黒曜石と多種多様な石材が出土しました。一方で貝や魚骨、獣骨といった食料に関わる自然遺物は縄文時代の遺物包含層からほとんど確認されていません。かつては海岸線が現在よりも近かったことを考えると、海産物を示す遺物が見当たらないのは何を意味するのか、今後の検討課題です。

※1　土器や石器、金属器など、生活していた道具を含む土層。

※2　柱穴とするが必ずしも柱の穴ではなく用途不明の掘り込みも含む。

※3　石でつくられたやじり。

※4　木の実などを磨り潰すための石でつくられた球形の道具。

※5　獣の皮や肉を剥ぐための石でつくられたナイフ。

【参考文献】

1) 木崎甲子郎編『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社　1985

2) 高宮廣衛『沖縄先史遺跡と文化』第一書房　1994

3) 那覇市教育委員会「那崎原遺跡」『那覇市文化財調査報告書』第 30 集　1994

4) 那覇市教育委員会「鏡水箕隅原 C 遺跡」『埋蔵文化財発掘調査ニュース』№15　2008

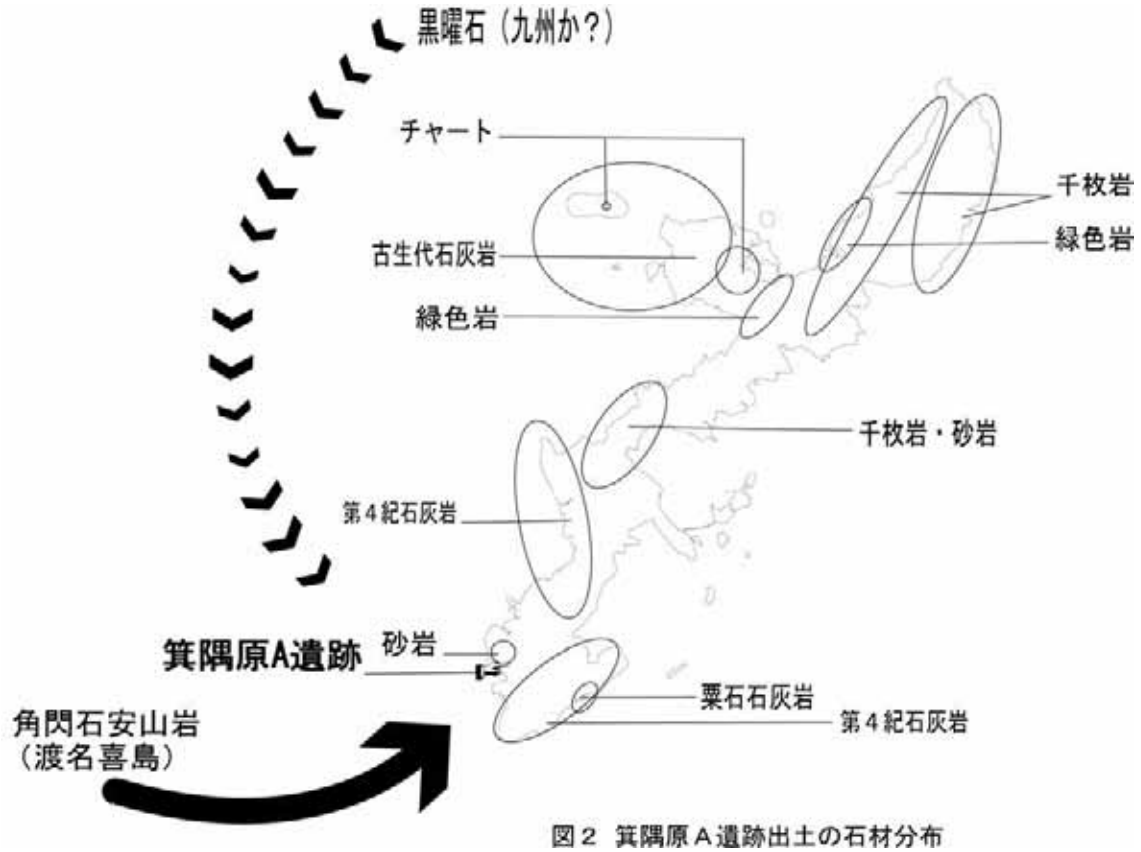


図２　箕隅原Ａ遺跡出土の石材分布

第１表　沖縄諸島の暫定編年

本土		沖縄	土器形式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	現行編年
縄文時代	草創期	前期 I	↑ ・ ↑ ・			早期
	早期	II	・ ・ ・ 野国第四群 ヤブチ式土器 東原式土器	爪形文土器	ヤブチ式 6670±140ｙ.B.P. 東原式 6450±140ｙ.B.P.	
	前期	III	条痕文土器 室川下層式土器 曽畑式土器 神野Ａ式土器 神野Ｂ式土器	条痕文土器 曽畑式土器	曽畑式土器（渡具知東原） 4880±130ｙ.B.P.	
	中期	IV	面縄前庭Ｉ式土器 面縄前庭II式土器 面縄前庭III式土器 面縄前庭IV式土器 面縄前庭Ｖ式土器	旧具志川Ａ式 旧具志川Ｂ式 旧具志川Ｃ式 旧神野Ｃ式 旧面縄前庭式		
	後期	V	神野Ｃ式土器 神野Ｄ式土器 伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370±80.B.P. 伊波式（室川） 3600±90.B.P.	前期
	晩期	VI	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行 黒川式土器	中期
弥生時代	前期	後期 I	真栄里貝塚	板付II式土器 亀ノ甲類似土器		後期
	中期	II	具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期	III	アカジャンガー式土器	免田式土器	アカジャンガー式は中津野式並行か？	
古墳時代～平安時代		IV	フェンサ下層式土器		類須恵器	

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

{高宮廣衛　『沖縄先史遺跡と文化』　㈱第一書房　1994年３月　P133} より掲載しました。

具志川島遺跡群発掘調査

調査班　主任　片桐　千亜紀

１．場所

伊是名村具志川島

２．調査期間

平成 18～22 年度（５ヶ年計画）

平成 21 年度は発掘調査最終年度

３．具志川島遺跡群とは

具志川島は伊平屋村と伊是名村の中間に位置する、周囲４km 程の小さな無人島。1970 年までは学校もあった。この島で先史時代を中心とする多量の遺跡が確認されており、「具志川島遺跡群」と名付けられている。

４．調査史

これまでの発掘調査・研究によって沖縄県の先史時代を考える上で重要な、発見や研究がなされてきた。

1960 年代・・・具志川島で初めて遺跡の存在が報告される。

1970 年前半・・・採砂工事が行われる。

1975 年・・・分布調査が実施され、多くの遺跡が発見される。

1976～1980 年・・・初めて本格的な発掘調査が実施される（第Ⅰ期）。

1989～1992 年・・・２度目の本格的な発掘調査が実施される（第Ⅱ期）。

2006～2010 年・・・３度目の本格的な発掘調査を実施（第Ⅲ期）。

５．調査成果

A．岩立遺跡西区

縄文時代中期相当と考えられる文化層から炉跡等の生活跡が確認された。また、サザエの蓋が多量に集中する遺構が確認され、火を受けた痕跡がある。性格については不明な点が多い。

B．岩立遺跡

最下層を確認するための試掘調査によって、縄文時代前期相当と考えられる土器が出土。

C．親畑貝塚

縄文時代後期相当と考えられる文化層の調査によって、礫が密集する状況を確認。人為か自然かについては様々な議論があり、さらなる検討を必要とする。

D．タチャー遺跡

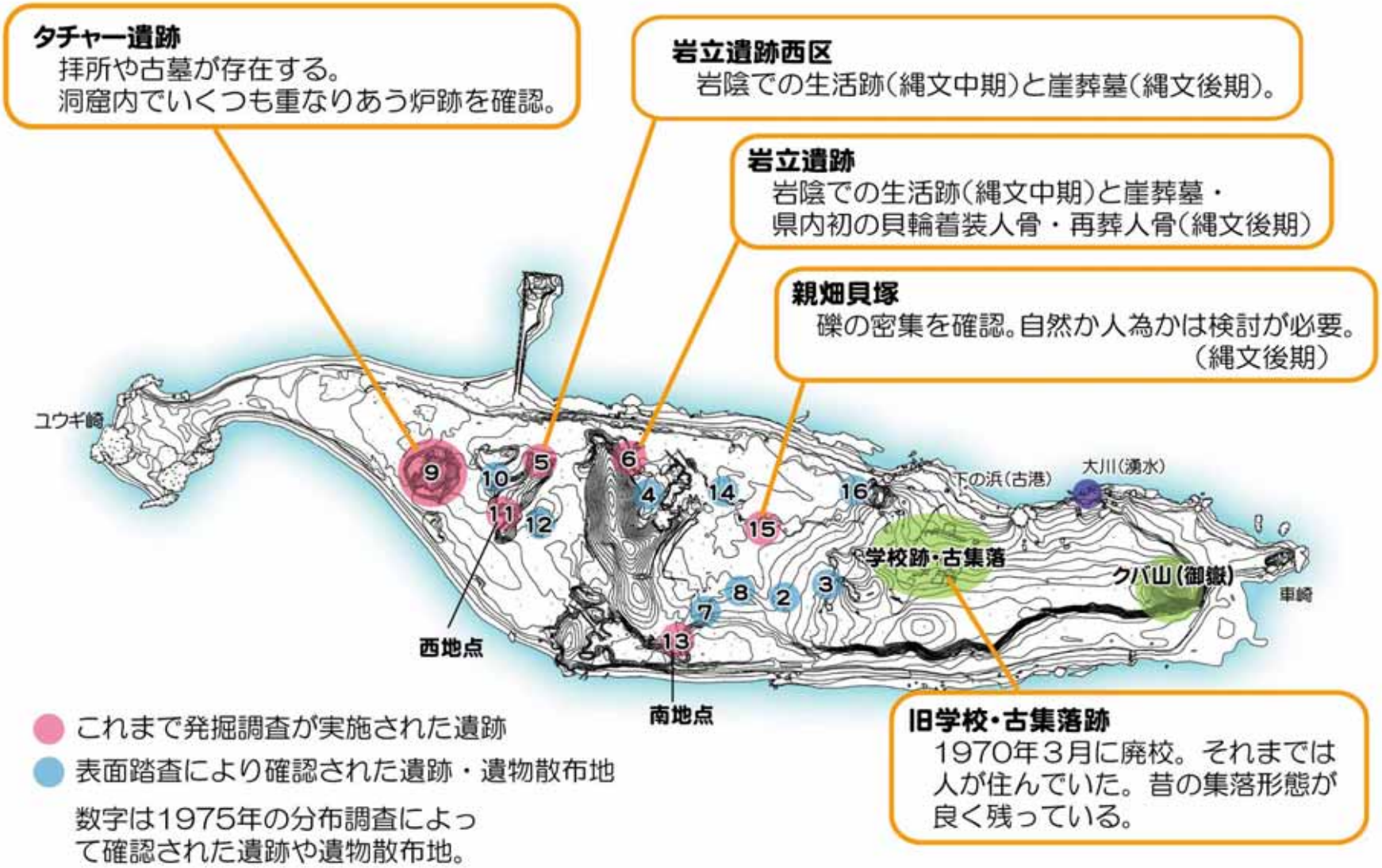
洞窟内の試掘調査によって、炉跡が重なり合う遺構が確認された。炉の特徴と出土遺物の組成を考えると、単なる生活跡とは考えられない。

岩立遺跡西区　　サザエの蓋集中遺構

親畑貝塚

タチャー遺跡　炉跡の堆積

タチャー遺跡　マガキガイ検出状況



具志川島遺跡群の位置とその他の文化財

首里城跡「銭蔵跡」

沖縄県立埋蔵文化財センター調査班　仲座久宜

事 業 名：首里城跡発掘調査

所 在 地：那覇市首里当蔵町３丁目１番

時　　代：グスク時代～近代

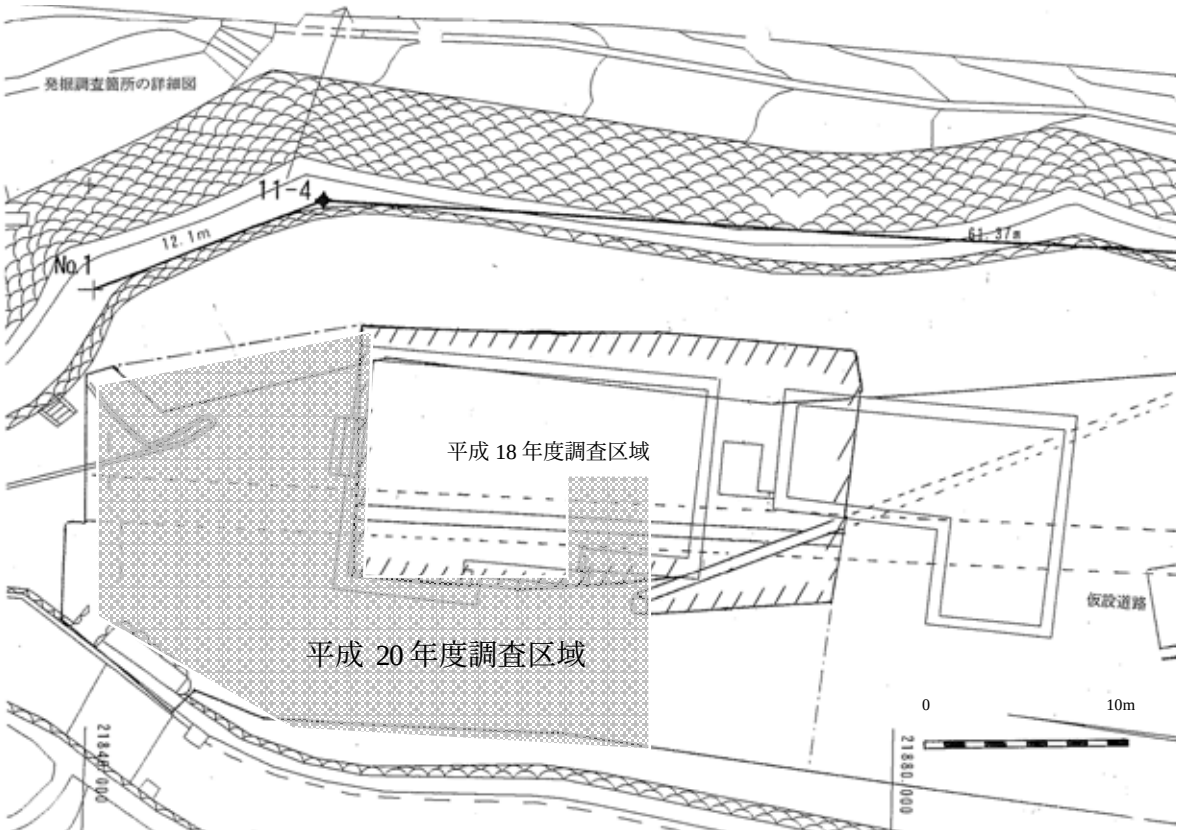
調査期間：平成 20（2008）年９月１日～平成 21（2009）年２月 28 日

調査内容：首里城跡復元整備に伴い「銭蔵跡」の遺構確認調査を約 300 ㎡実施

１．はじめに

平成 20（2008）年度の首里城跡発掘調査は、平成 18 年度に引き続き、かつて久慶門東側、北外郭内に位置していた銭蔵の遺構を確認する目的で実施した。ここでは銭蔵の歴史的変遷に加え、現時点で判明している主な調査成果について報告する。

第１図　調査区位置図（沖縄県首里旧城図（明治前～中期）横内家資料をトレース・加筆）



第 2 図　調査区詳細図

２．銭蔵の歴史的変遷

銭蔵の創建についての記録は現時点で見あたらない。しかし、建物が存在した北外郭部分が、尚真王代（在位 1477～1526 年）に拡張されたとする記録から、この工事を終えた 16 世紀前半以降に創建されたことが想定できる。また、1733（尚敬 21）年に銭御蔵を御用酒御蔵に改め、続いて 1749（尚敬 37）年に再び銭蔵を金蔵に復したとする記録から、その頃にはすでに建物が存在し、銭蔵と称されていたことがわかる。

その後、銭蔵は 1879（明治 12）年に廃藩置県とともに熊本鎮台沖縄分遣隊の炊事場として転用される。1894（明治 29）年の分遣隊撤退以降は建物が撤去されたと見られ、1930（昭和６）年頃製作の阪谷図では、畑地の表記が見える。続いて 1936（昭和 11）年には首里至聖廟が建立されるが沖縄戦で破壊され、戦後は琉球大学の開学により第Ｉ理学校舎が建つ。

銭蔵関連年表

・1477（尚真１）～1526（尚真 50）年：尚真王代に北外郭部分が拡張される
・創建年代は不明だが外郭拡張後に創建か
・1733（尚敬 21）年：銭御蔵を御用酒御蔵に改める
・1749（尚敬 37）年：再び銭蔵を金蔵に復した
・1879（明治 12）年～1894（明治 29）年：熊本鎮台沖縄分遣隊が炊事場として使用
・1894（明治 29）年以降：建物は解体され跡地は畑として使用か
・1936（昭和 11）年：銭蔵跡に首里至聖廟建立
・1945（昭和 20）年：沖縄戦により首里至聖廟が破壊される
・1950（昭和 25）年：琉球大学開学（第Ｉ理学校舎建設）

３．絵図資料に見る銭蔵

銭蔵の外観については、18 世紀以降に描かれた絵図や平面図から、ある程度の情報を得ることができるが、その機能や内部構造等に関する記録はほとんど見あたらない。ここでは現存する絵図資料を基に、その構造について考えてみたい。

18 世紀初頭とされる「首里城古絵図」では、２階建ての銭蔵及び厩（うまや）が描かれ、その配置は、明治前～中期作とされる「沖縄県首里旧城図」（横内家資料）や、1881 年頃の作とされる「首里城図」、1879 年以降の「熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」と同様である。しかし、「首里城古絵図」に見える厩は、他の 3 点と区画が若干異なり、後世に改変がされた可能性を示している。また、「熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」では、銭蔵が炊事場として使用され、その西隣に「浴」と示された区画が新たに確認できる。これは浴室を指すと思われるが、銭蔵及び厩の建物はそのまま使用され続けたものと思われる。

４．調査の成果（遺構と遺物）

今回の調査区は、平成 18 年度調査区を南及び西に拡張して発掘調査を開始した。その結果、銭蔵の区画を示す遺構は確認できなかったが、次の３時期に区分できる遺構が検出されている。

第１期：尚真王代（在位 1477～1526 年）に行われたとされる北外郭拡張時の造成層（旧造成層）。造成土はクチャで構成され、旧地形を反映して北に傾斜している。首里城北側の土壌はクチャが分布することから、その北側から造成土を持ち込んだ可能性が考えられる。遺物は少ないが、14 世紀後半～15 世紀初頭の中国産陶磁器が出土する。また、造成土中に小範囲ながらマガキガイが一括廃棄された痕跡が確認され、造成工事との関わりで興味深い。

第２期：外郭拡張直後に築造されたと見られる石組み遺構。基盤となるクチャを掘り込み、長方形に石組みを施す。内部は崩落した遺構の石が底面に広がり、断面で分層ができないことから、遺構機能時は空洞が保たれ、廃棄に際しては短時間で埋められたことが考えられる。この配置や構造から、遺構は銭蔵かその前身となる建物の地下構造物と思われるが、性格は判然としない。遺構内からは中国産陶磁器や鎧金具等の金属製品がわずかに出土している。

第３期：17 世紀以降に造成した痕跡（新造成層）。第１期の外郭拡張時の造成層を、深く割り込む形で入る造成土。首里城はかつて数回の地震に見舞われ、城壁が崩壊した旨が記録に見えることから、今回の痕跡はそのいずれかの地震で決壊した外郭部を、応急補修したことが考えられる。遺物は明朝系灰瓦及び沖縄産陶器が中心で、わずかに中国産陶磁器が含まれることから、17 世紀以降としている。また、黒地に朱漆を施した漆器片や、微小な塗膜片が多数得られている。造成土にこれらの遺物が多量に含まれている状況から、造成に際しては城内の土砂を用いたことが考えられる。

５．まとめ

今回の調査により、銭蔵の区画を示す遺構は確認されなかったが、３期に区分できる外郭拡張の状況や工程、建物地下構造物の存在、外郭補修の痕跡を確認することができた。

この北側外郭の調査は、今後も順次進めていく計画にしており、遺構が見られない地点に関しては、今回と同様にトレンチ堀りによる造成状況の確認を予定している。これにより、これまで判然としなかった外郭拡張の時期や工程、旧地形に関する情報が、より詳細に得られるものと思われる。

図版１　調査区遠景（東から）

図版２　調査区近景（北東から）

図版３　第１期：旧造成層堆積状況（Ｃ－２西壁）

図版４　第１期：旧造成土内マガキガイ集積半裁作業状況（Ｃ－２）

図版５　第２期：方形石組み遺構検出状況（東から）

図版６　第３期：新造成層堆積状況（Ｃ－３北壁）

円覚寺跡

調査班　主任　仲座久宜

事 業 名：円覚寺跡発掘調査

所 在 地：那覇市首里当蔵町３丁目１番

時　　代：グスク時代～近代

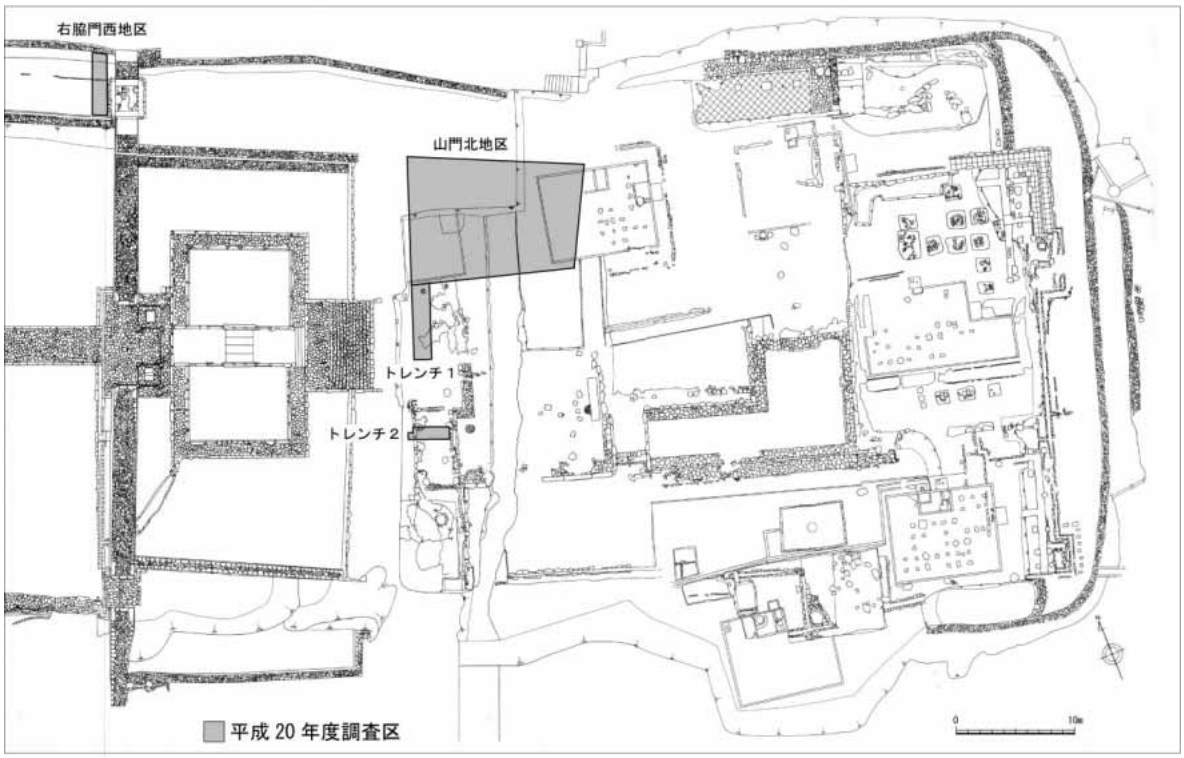
調査期間：平成 20（2008）年７月 14 日～平成 20（2008）年８月 31 日

調査内容：円覚寺復元整備に伴い山門周辺及び右脇門西側の遺構確認調査を約 300 ㎡実施

１．はじめに

平成 20（2008）年度の円覚寺跡発掘調査は、おもに山門北側に存在した石積みを検出する目的で遺構確認調査を実施した。その結果、大半の遺構は沖縄戦や開発により破壊されていたが、建物周辺施設の遺構や、造成に関わる遺構が検出されている。

ここでは円覚寺の歴史的変遷に加え、現時点で判明している主な調査成果について報告する。



第１図　円覚寺跡調査区位置図

２．円覚寺の歴史的変遷

円覚寺の創建は、尚真王の命により 1492 年に開始され、約３年後に完成したとされる。その後、増築や修復を重ね、1933 年には数棟が国宝に指定されるが、1945 年の沖縄戦により破壊される。戦後は琉球大学の開学により教員宿舎が建てられ、1965 年にグラウンドが敷設される。

年号			内容	文献等
西暦	琉球	日本		
1492	尚真16	明応1	円覚寺創建。仏殿、荒神堂、寝室、方丈、仏殿、法堂、山門、両廊、僧坊、厨庫、浴室が創建当初の建物。「広範囲に地ならしを行い瓦を造って堂宇に葺いた」とされる。	『球陽』、『琉球国由来記』ほか
1494	尚真18	明応3	約3年をかけて七堂伽藍完備の禅宗寺院として完成。	『球陽』、『中山世譜』ほか
1496	尚真20	明応5	鐘楼築造、楼鐘鋳造。	『球陽』
1498	尚真22	明応7	放生池、放生橋築造。	『球陽』
1571	尚元16	元亀2	御照堂を加建。	『球陽』
1588	尚永16	天正16	方丈、大殿、山門を修復。	
1596	尚寧8	慶長1	法堂（仏殿？）修復。	
1670	尚貞2	寛文10	首里城正殿が瓦葺きになる。	『球陽』
1721	尚敬9	享保6	大殿（龍淵殿）焼失、同年再建。	『球陽』
1722	尚敬10	享保7	井戸の西側に行堂を創建。	
1728	尚敬16	享保13	獅子窟、御照堂を小堂に改築。	
1744	尚敬32	延享1	鐘楼、亭寮、照堂寮の移築、修復。	『球陽』
1945	―	昭和20	沖縄戦により焼失。	

第１表　円覚寺建築関連年表

３．調査の成果（遺構と遺物）

今回の調査において検出された円覚寺の施設に係る遺構は、山門北地区で検出された排水用の溝状遺構及び、山門北門廊の東側に設置されていた埋甕跡等のほか、円覚寺の造成に係る遺構がある。

溝状遺構は、山門周辺の雨水等を池側に排水していたものと思われ、絵図等に確認できないことから、暗渠として埋設されていた可能性がある。埋甕跡は古写真等から、山門北門廊東側に設置されていたものと思われる。この埋甕内部底面からは現代遺物が出土していることから、戦前まで使用されていた可能性がある。

そのほか、地ならしの痕跡である造成遺構では、その堆積状況から、凹地状の旧地形を寺の後背にあたる東側から西にかけ、短期間で造成していることが判明した。また、造成時にはすでに放生池を設置することが計画されていたと見え、池の東側造成土中には、長さ約8m、高さ約3ｍにおよぶ片面の石積みが確認されている。この石積みは、造成土の土圧を抑える土留めの機能があると考えられ、当時の土木技術水準の高さをうかがわせる。造成土からの出土遺物はわずかだが、15 世紀後半の白磁、染付やウルシ塗膜等が得られており、出土した陶磁器の年代は、円覚寺の創建年代とされる 1492 年とおおむね一致する。

図版1　調査区近景（北から）

図版2　山門北地区遺構検出状況

図版3 山門北地区 溝状遺構検出状況

図版4 山門北地区 土留め石積み検出作業状況

中城御殿跡

―県営首里城公園整備に伴う発掘調査―

調査班　主任　上地　博

Ⅰ　はじめに

沖縄県教育委員会では、平成19年度から県営首里城公園整備に伴って中城御殿の発掘調査を実施しています。中城御殿とは、次の国王となる王世子（王子・世子）が住む住居のことをいいます。なお、名称については、王子が中城間切を領有していたことに因んでいます。尚豊王代（1621～40）に佐敷王子尚文のために県立首里高等学校敷地の西部に創建されていました。その後、中城御殿は明治に入り、首里真和志町（県立首里高等学校の西側）にあった場所から首里大中町に移転することになり、1870年着工、1873年11月竣工、1875年３月５日に世子が入居した。1879年の琉球処分の時には、中城御殿に国王以下たくさんの人達が移り、明治末期には首里城附属の大美御殿や聞得大君御殿からも移り住んでいた、と云われています。その後、建物等は1945年３月まで完全に保存されていたが、同年４月に沖縄戦で砲撃を受け、多くの宝物と共に炎上しています。

Ⅱ　調査の経緯と目的

今回の発掘調査は、沖縄県土木建築部が昭和59（1984）年度に策定した『首里城公園基本計画』及び、昭和63（1988）年度に『首里城公園基本設計』に基づく遺構の確認調査で、県土木建築部（都市整備・モノレール課）から委託を受けて、沖縄県教育委員会（所管課：文化課、事業実施：沖縄県立埋蔵文化財センター）が実施しています。発掘調査は中城御殿の整備・活用を図る目的で、県土木建築部が実施する公園整備の検討資料を得るためです。

Ⅲ　調査の成果

平成19年度に引き続き、遺構の残存状況を確認するために旧館の前庭の東側10m×10mのグリッドを４箇所に設定し（約400㎡）、遺構の確認調査、更に、敷地の奥にある旧県文化課首里資料室（旧文化財保護委員会）の建物の脇の庭園の前庭で１m×1．5mと庭園の背後に１m×１mのグリッドを設定し（約2．5㎡）、試掘調査と、琉球石灰岩を加工した池（庭園の一部）の露出（約60㎡）を行った（合計約462．5㎡）。発掘調査は、沖縄県立博物館が真栄平房敬氏からの聞き取り調査によって作成された資料を参考に調査を行った。

遺構は、現地表面から約30㎝の地点で検出され、石敷遺構や側溝、建物の基礎、礎石等が確認できた。更に、敷地の奥にある旧県文化課首里資料室（旧琉球政府文化財保護委員会）の建物の脇にある琉球石灰岩を加工した池（庭園の一部）の露出作業を行った。更に、昭和25年頃に建てられた旧首里市役所のコンクリート製の建物の基礎、溝等も確認された。特に、側溝は構造上５タイプあることが判った（落ちし蓋の無い「コ」字状の組み合わせ式側溝、落とし蓋用側溝［両面・片面］、石列を加工し、排水施設を造った側溝）。

出土遺物は、中国産陶磁器（白磁・青磁・染付・緑釉陶器・褐釉陶器等）や本土産陶磁器（肥前・有田、砥部、薩摩焼等）や沖縄産施釉・無釉陶器、土器、キセル、瓦、磚、円盤状製品、金属製品（角釘・古銭・耳盃・香炉・花鋲［華鋲］等）、玉等の人工遺物や、貝や骨等の自然遺物等が確認され、更に、戦前後の遺物等（ガラスや瓶、櫛、ボタン、簪、囲碁石、歯ブラシ、万年筆のフタ、炭、石材等）が出土しています。特筆する事項として、建物内の側溝から大量の玉や銅製品（耳盃・香炉等）が確認されています。玉は玉飾瓶子［御玉貫］の本体部の錫製の瓶子に糸で綴って全体を覆い装飾したものと思われます。今のところ、錫瓶は確認されていません。更に、その周辺から土坑状に堀り込んだ所から銅製品等が確認されています。

今後の調査では、平成19・20年度の成果を基に、昨年度の調査箇所を広げ、中城御殿の往時の遺構を中心に検出を行う予定です。

宮国元島上方古墓群発掘調査の概要

【 古墓群の位置 】

宮古島は、島の周囲が石灰岩の崖になっています。古墓群は宮国集落（旧上野村）東側の崖地帯を利用しています。遺跡の目の前には宮国の旧集落である宮国元島遺跡があり、ここは 1771 年におこった明和の大津波で被害をうけたと伝えられています。また、すぐ近くでは 1873 年にドイツ商船のロベルトソン号が座礁しています。

【 調査の概要 】

今回の調査は県道工事のため平成 19 年度から行われているもので、工事予定地とその周辺に 20 数基の墓が確認されています。平成 20 年度に調査した墓は 10 基で、１基が掘り込み墓、９基は岩陰墓でした。

１．墓の概要

宮国元島上方古墓群で確認された墓は掘り込み墓と岩陰墓の２種類です。

掘り込み墓は崖面中ほどの平坦になった部分を墓庭にし、崖面を掘って墓室をつくっています。この墓は、墓庭に高さ約１ｍほどの石積みをめぐらせ、墓室は約９㎡と古墓群内では規模が大きいものです。外観は破風墓や亀甲墓に似ています。ここは、上地坊という人物の墓と伝えられているそうですが、この人物を思わせる遺物はみつかっていません。

岩陰墓は崖面や岩のくぼみを利用したもので、古墓群内ではもっとも多い形態の墓です。墓の形態は、①小さな洞穴のような横に深いくぼみを利用したもの、②崖や岩がくぼんだ部分の片面に石積みをつくって墓にしたもの、③崩れ落ちた岩の隙間を利用したもの、の大きく３種類に分けられます。多くは①の形態の墓で、②の中には高さ約３ｍの土留めのための石積みを設けた大がかりな墓がありました。

岩陰墓には、正面に石を積んで墓口をつくるものがあり、中には畳１枚ほどもあるようなテーブルサンゴで入口を閉じたり、入口の屋根につかっている墓がありました。また、墓室

の上面観（平面を上からみた状態）がひょうたんのようにくびれて、墓室が手前と奥側に2つある墓があり、これらはくびれの部分にも石を積んで奥の墓室を閉じていました。

19 年度は一次葬の墓がみつかっていますが、今回はありませんでした。骨は指先の小さなものまであったことから、同じ墓の中で骨を整理（改葬）したことがうかがえます。墓内には大型の土器や陶器の壺があったことから、調査当初は壺に骨を入れる葬法を考えていました。しかし、明らかに骨を壺に入れていた墓はみつからず、多くの墓では墓室の一ヶ所に骨をまとめたものでした。四肢骨を並べるようにまとめていた墓もありましたが、多くは雑然と集めたようなものでした。

２．遺物の概要

もっとも多くみつかったのは焼き物です。沖縄製の陶器（壺屋焼）は碗や壺、急須、油壺といった日用品でした。他にも近世から近代にかけての日本や中国製の陶磁器の碗やさかずきなどが、近世につくられた宮古式土器の壺がみつかっています。

沖縄県内の近世の墓からは日本や中国の陶磁器が多くみつかっていますが、今回は日本や中国の陶磁器は少ないといえます。ただ、壺や碗は沖縄製、さかずきは中国製が多い傾向がありそうです。さかずきは中国のものが多い点は久米島ヤッチのガマも同様です。

土器は宮古式土器などとよばれるもので、宮古第一型式土器と第二型式土器の２種類に分けられています（他の名称もありますがこれをもちいます）。今回は新しい時期の第二型式が多いといえます。墓の時期は、沖縄大学沖縄学生文化協会が行った分布調査での「元島では第一型式、現集落では第二型式が中心」という報告から考えることができます。

宮古の墓から土器の壺に骨を入れた例があり、この時は壺の口を打ち欠いて「使用にあたっては、一次的な機能を意図的に損ねたようである」とされます。今回の調査では、陶器もふくめて明らかに骨を入れていた事例はありませんでした。

陶磁器の壺は完全な形のものが多いのですが、碗や瓶、土器の多くは破片やこわれたもので、中には意図的にこわしたと思われるものがありました。こわれている土器の破片を組み合わせると、明らかに一ヶ所に衝撃を受けてこわれた（投げ捨てた？ 叩き割った？）ものがありました。沖縄本島では骨をうつした後の壺（厨子甕）をこわす事例があるそうです。また、壺の底や側面に穴を開けたものがあります。八重山諸島ではパナリ焼の壺の底や側面に小さな穴を開けて骨を入れる壺にした事例があります。このような共通点はありますが、宮古島の墓からみつかる土器も骨を入れるための目的があったのでしょうか。今回、底に小さな丸い穴を開けたり口の部分だけを打ち欠いた例は少なく、また、骨をうつした後のものをこわしたとはかぎりませんので、こわすことに何かの意味があったかもしれません。

ビーズはガラス製と水晶(?)製のものがあります。ガラス製のものは大きさが２～３㎜ととても小さいことから、現地でみつけたものよりも土をフルイがけした時に多くがみつかっています。これらのビーズは副葬品と思われ、宮古島では棺桶にキセルや身につけていたもの（ジーファーも？）、銭を入れていたそうです。その他、碗やとっくり、さかずきも副葬品でしょうか。壺に名前を記したもの（銘書）はありませんでしたが、すずりに名前を記したものがあり、これも亡くなった方のものを副葬品として入れたかもしれません。

他にも民俗事例を思わせるものがあります。宮古島では棺桶をおく台としてすり鉢（ナイパー）をつかっていたそうで、すり鉢が数点みつかっています。また、墓に水ガメをおき、

それに入れた水を湯茶、花生にもちいたそうで、水供養は死者にとってもっとも大切だったそうです。みつかった壺もそのためのものでしょうか。

用途が不明な貝製品（有孔札状製品、有孔二枚貝）、骨製品があります。骨製品は細かな細工があるので、何の部品でしょうか。有孔札状貝製品と似たものとして、宮古島の遺跡では土器の破片を円形や四角に加工したものに穴を２つあけた土製品がみつかっています。素材はちがいますが同じ用途でしょうか。

墓の時期よりも古い遺物として、今から約２千～１千年前のシャコガイ製斧、13～14 世紀の野城式土器があります。シャコガイ製斧は、先史時代の先島諸島が南方文化の影響をうけていることを示す遺物とされ、宮国元島遺跡など宮古島各地からみつかっています。シャコガイ製斧は墓の外からみつかったことから、崖の上にあった遺物が落ちてきたと考えました。そこで崖の上の平坦地でも調査を行いましたが、シャコガイ製斧のころの遺跡を確認することはできませんでした。しかし、宮国元島遺跡でもシャコガイ製斧がみつかっていることから、周辺にそのころの遺跡が存在する可能性もあります（なお、平良字島尻の長墓遺跡〔こちらも近世の墓〕からもシャコガイ製斧がみつかっています）。

【 まとめ 】

以上、調査の結果をまとめます。

① 墓の種類は崖面を利用した掘り込み墓、岩陰墓があり、岩陰墓が中心。

② 古島の土器は第一型式、現集落と古墓群の土器は第二型式が中心である。そのため、主に墓として使われたのは現集落の時期であろう。

③ 骨が一ヶ所にまとめられており、一次葬ののちに改葬（あるいは新たな棺を入れるための整理？）を行っている。洗骨を行っていたのか、骨を壺に入れていたのかは不明。

近年、宮古島では近世以降の墓を調査する事例が増えており、センターはこれまでに新里東元島遺跡や尻並遺跡などで墓の調査を行っています。今回の調査も宮古島の葬墓制を考える資料の一つになるものと思います。

〔ついでながら〕

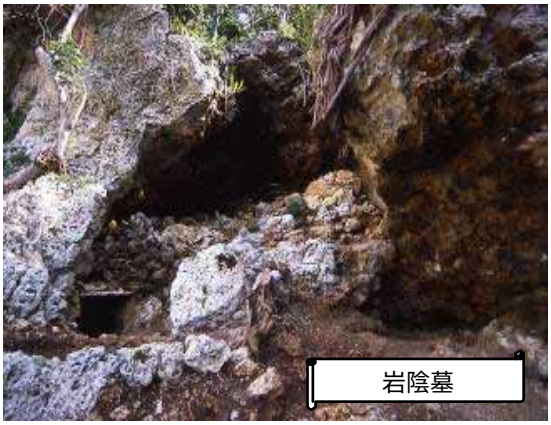
沖縄本島や久米島の墓や遺跡から宮古式土器と似た土器がみつかります。宮古式土器の特徴のひとつとして、土器に赤い粒を混ぜるという点があります。沖縄諸島からみつかる土器と宮古島の土器を比較したところ、似た特徴があるため同じ系統の土器の可能性があります。

ではなぜ宮古式土器が沖縄諸島でみつかるのでしょうか。沖縄諸島でも似たような土器をつくっていたと考えることもできますが、直接、宮古島から運ばれてきた可能性もあります。

参考文献　岡本恵昭　1999年「宮古島における葬制用語の解説と研究」『平良市総合博物館紀要』６号
沖縄大学学生文化協会　1972年『郷土』11号
城辺町教育委員会　1980年『城辺町保良地区の遺跡分布』
徳嶺里恵　2006年「考古学からみた先島諸島の墓」『廣友会誌』２号

遺跡の遠景

掘り込み墓


岩陰墓

岩陰墓

墓内のようす

墓内のようす

陶磁器

貝製品

シャコガイ製斧

【宮古島で洗骨・埋葬（昭和四六年）のようす】

○城辺町字仲原（現宮古島市城辺仲原）の事例

棺が揚げられて寝棺の蓋があけられるや否や、白骨化した死骸が周囲の遺族の視界にはいる。埋葬されたままの姿で少しの乱れもなく、永眠している。呼びかけたら答えが返ってくるのではないかと思われるような穏やかな死態である。一瞬、人々の眼は異様に輝いたかと思うまもなく、それもやがて嗚咽に変わり涕泣が起こり悲痛の気があたりをみたす。（中略）とり上げられた遺骨は、島内ではどこでも同じ仕法で扱われているのであるが、鄭重に水洗いされたのち泡盛酒でいちいち拭いとられ、塵ひとつつかないように清められてからクツガミ（骨甕）に納められる。

○平良市字大浦（現宮古島市平良大浦）の事例

埋葬人夫が、新しい棺の置場所を安定させるために、散乱する白骨をいとも無造作に鷲掴みにし、乱暴に傍へ抛り投げたりしている。なかには故意でないにしても足で踏みつけているものもいる。これはいったいどういったわけなのであろうか。これほど死者を侮辱する態度があるだろうか。（中略）筆者は、余りにかけ離れた祖先信仰と遺骨軽視との二つの断絶に、両者をどのように繋げたらいいのか、懐疑の念の起こってくるのを止めることができなくなっていた。

櫻井徳太郎『櫻井徳太郎著作集』六（吉川弘文堂　一九八八年）

○解説…櫻井が宮古島の洗骨や移葬を検討した際に、埋葬風景を記したもの。特に後者では葬儀で遺族が「哀泣する歎き」と骨の扱いのちがいに驚いている。

【久米島での洗骨（一九世紀）のようす】

一　洗骨之儀何方も一度ニ相限候処嘉手苅村之儀毎年或年越親先祖洗骨仕候方も相之由甚以不宜仕形候間向後一度ニ限仕候様可申渡事

『久米具志川間切規模帳』（一八三一年）　※『沖縄県史』前近代六　首里王府仕置二所収

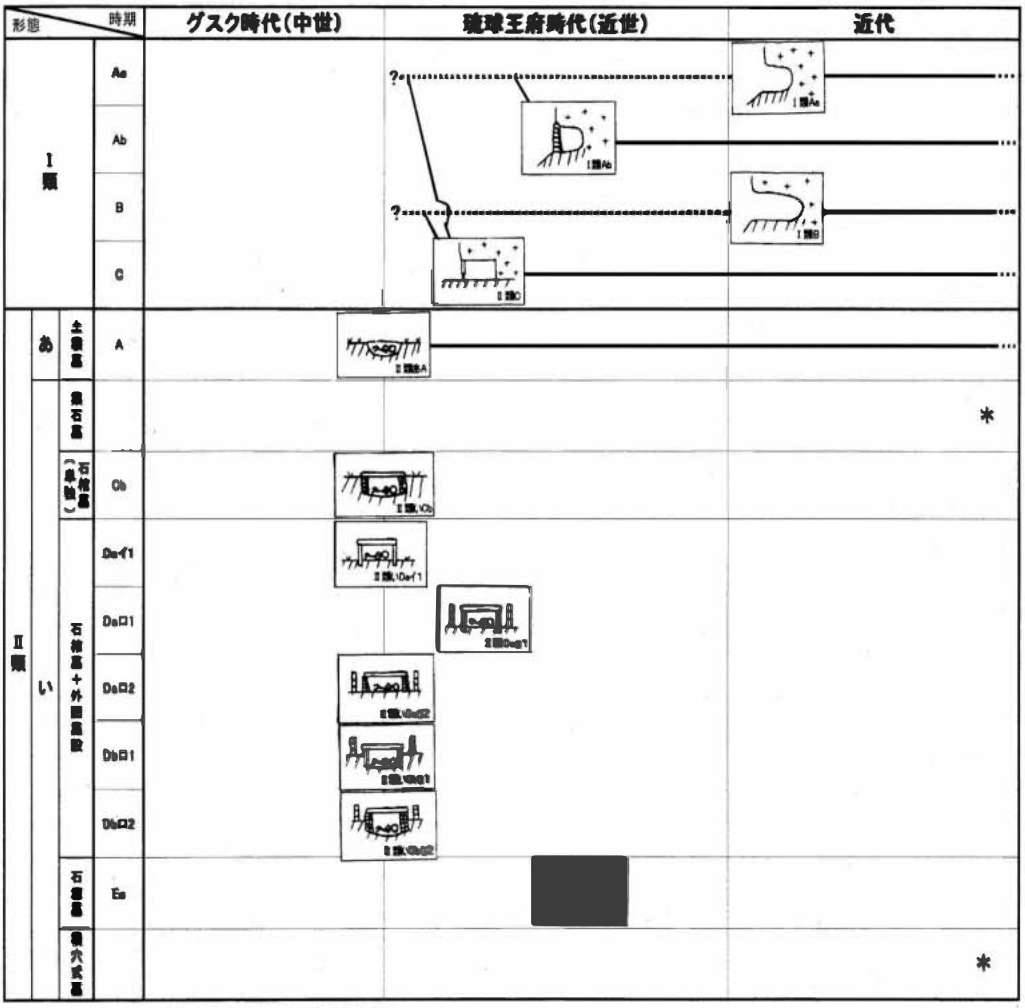
○解説…具志川間切嘉手苅村（現久米島町字嘉手苅）では洗骨を度々も行っているので、今後は行わないようにとのお触れ。

【与那国島での墓のとらえられ方の変化】

ダマトゥ・ハガは元々山奥の境界を意味して呼ばれ、遂いに大和墓になったようである。この誤解は一六二一年に薩摩の藩士毛利元親一行が検知竿入りのために来島した頃から始まったものと思う。（中略）ことに藩士達は、源頼朝が島津忠久を薩摩、大隅、日向三国の守護職に任命して、平家の残党を薩南の島々へ追放した史実を知っていたと思われるからである。この藩士達の話から与那国島の大和墓が世に現れるようになり、一八八五年に小学校創立されるや、日本史の教育が始まり、源平合戦を知るようになり、大和墓は屋島墓ともいわれ、一八九三年の笹森氏の探検談に間で発展したようである。

池間栄三『与那国の歴史』（一九五九年）

○解説…与那国島に平家の墓と伝わる大和墓は墓内にキセルがあることなどを検討してこれを否定、なぜこのような話しが生まれたのか考察したもの。文中の笹森氏とは一八九三年に沖縄各地をめぐった笹森儀助（著書に『南島探検』）のこと。



第5図　推移図<宮古諸島>

第2表　墓の分類

- Ⅰ類：岩陰・洞穴墓
  - A.岩陰墓
    - a前方囲込(無)
    - b前方囲込(有)
  - B.洞穴墓
  - C.掘込墓
- Ⅱ類：開地墓
  - あ.施設(無)
    - A.土壙墓
  - い.施設(有)
    - B.集石墓
      - a積石
      - b置石
    - C.石棺墓①
      - a板石
      - b積石
    - D.石棺墓②
      - a地上式
        - イ.外囲施設(無)
          - 1板石
          - 2積石
        - ロ.外囲施設(有)
          - 1板石
          - 2積石
      - b半地下式
        - イ.外囲施設(無)
          - 1板石
          - 2積石
        - ロ.外囲施設(有)
          - 1板石
          - 2積石
    - E.石積墓
      - a墓口(無)
      - b墓口(有)

徳嶺里江　2006年「考古学からみた先島諸島の墓について」『廣友会誌』2　廣友会

基地内埋蔵文化財分布調査の成果

沖縄県立埋蔵文化財センター
調査班　主任　中山　晋

１　事業概要

基地内埋蔵文化財分布調査は、平成 9 年度から文化庁の国庫補助事業により実施し、今年で 13 年目となる。

本調査は、米軍基地や自衛隊基地における埋蔵文化財（遺跡）の実態把握と、遺跡分布地図等の基礎資料作成を目的としている。

２　これまでの経緯

平成９年度は、市町村における基地内埋蔵文化財把握状況の整理し、報告書を刊行。

平成 10 年度から実際に現地（キャンプ瑞慶覧）において試掘調査に着手。

平成 11 年度には、キャンプ瑞慶覧に加え、普天間飛行場内においても試掘調査を実施。

平成 12 年度からは、普天間飛行場内での調査を継続して実施。

平成 20 年度に普天間飛行場内の調査可能範囲における試掘調査はほぼ終了。

３　調査手法

普天間飛行場という広大な範囲において試掘・確認調査の正確な位置を把握するため、あらかじめ３段階の地区割を設定した上で、すべての調査箇所について座標で管理している。

（１）表面踏査

実際に現地を歩き、地表面を観察しながら遺物の散布状況や地形等を確認する。

（２）試掘調査

遺跡の有無を確認するための部分的な発掘調査。普天間飛行場ではあらかじめ設定した地区割に基づき、30m メッシュの交点において実施している。

１箇所あたりの規模は 4m× 4m で、原則として重機（バックホウ）を使用して慎重に掘削を行うが、重機を使用できない場所については、2m× 2m の範囲を人力により掘削する場合もある。

（３）確認調査

遺跡の範囲・性格・内容等を把握するための部分的な発掘調査。試掘調査によって確認された遺跡についてより詳細な範囲・性格・内容を調べるために、試掘調査よりも広い面積を発掘する。普天間飛行場では、原則としてあらかじめ設定した地区割にもとづいてトレンチを設定し、遺構の広がり、土の堆積状況などを検討して遺跡の範囲などを確定する。

４　平成 20 年度の調査成果

8 月 1 日～２月５日の約６ヶ月間にわたり、表面踏査、試掘調査、確認調査を実施した。

（１）表面踏査（第１図）

墓関連の遺物が散布している地点が確認されたため、その範囲について簡易測量を

実施した（フテ 24-I ライン付近）。現在地表面で古墓自体は確認できないが、昭和 23 年に米軍が測量した地形図によると、遺物が散布している地点の近くに墓が確認できるため、基地造成の際に破壊された痕跡と思われる。

（２）試掘調査（第２～４図、図版１～４）

重機を用い、49 箇所実施した。その結果、近代以前の耕作土と思われる堆積層が 27 箇所（そのうちグスク時代までさかのぼる可能性のあるものは８箇所）確認された。暗渠、溝状遺構や、いわゆる耕具痕・植栽痕と呼ばれる耕作関連の遺構が確認されたのは 10 箇所で、うち、グスク時代までさかのぼる可能性のあるものは２箇所にとどまった。

（３）確認調査（第１図、図版５～６）

平成 19 年度の試掘調査の結果、複数の地点で黄褐色砂質～粘質シルトが厚く堆積している状況が確認された。現在のところ、これらの土は地山である赤土（マージ）が雨水等の影響により谷もしくはすり鉢状のくぼんだ地形に再堆積したものと考えられている。同様の堆積状況は、宜野湾市教育委員会が調査を行った上原濡原遺跡でも見られる。なお、上原濡原遺跡は縄文晩期相当期の生産遺跡である可能性が示唆されている重要な遺跡である。

平成 20 年度は、この黄褐色砂質～粘質シルトのより詳細な情報を収集する目的で、試験的に小規模（6m×12m）のトレンチを 2 箇所設け、人力による確認調査を実施した（フテ 36-F トレンチ、フテ 36-G トレンチ）。

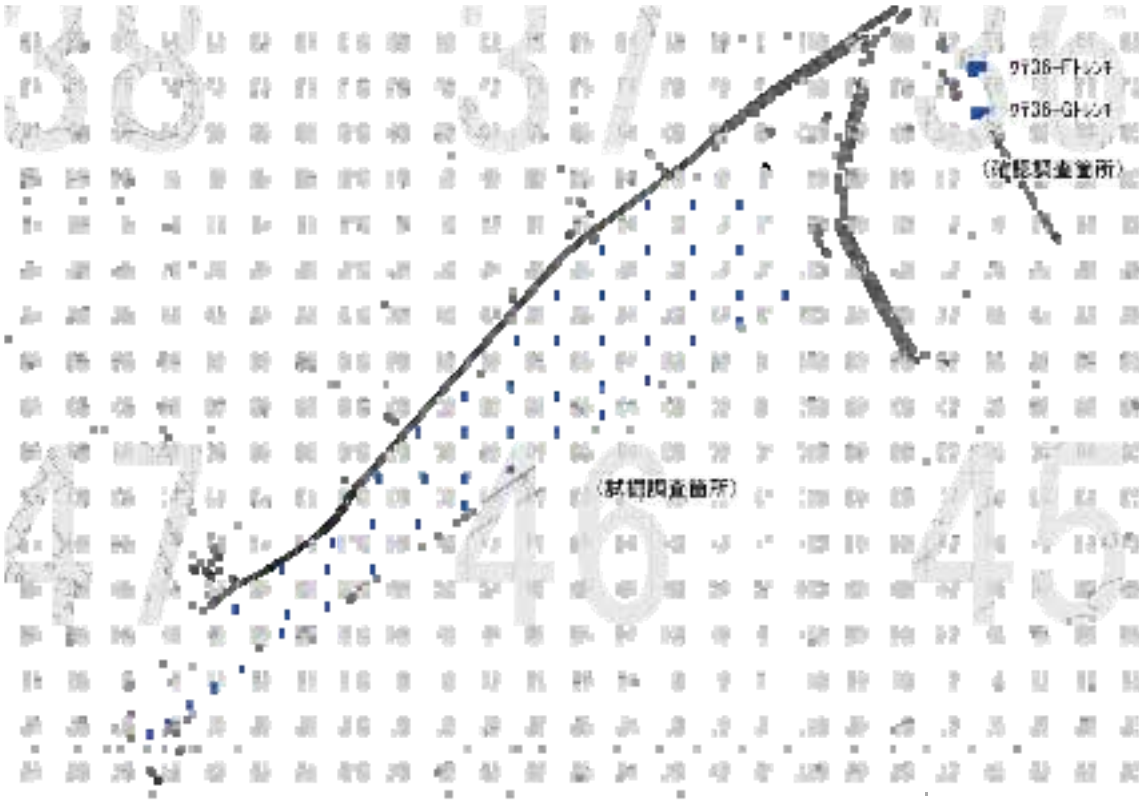
フテ 36-F トレンチでは、近世～近代の時期と思われる耕作土と、溝状遺構が確認された。さらに、グスク時代のものと思われる耕作土も確認できたが、明確な遺構や遺物は確認できなかった。その下から、目的とする黄褐色砂質～粘質シルトが瀕を出したが、時間の都合で一部分のみ 50 ㎝ほど掘り下げた時点で今年度の調査を終了した。黄褐色砂質～粘質シルトから得られた縄文土器は小片で３点のみであり、極めて少ない。今年度は、この黄褐色砂質～粘質シルトから調査を再開する予定である。

フテ 36-G トレンチでは、近世～近代の時期と思われる耕作土と、溝状遺構、ピット群が確認された。トレンチ内全面で地山であるマージを検出し、調査を完了した。

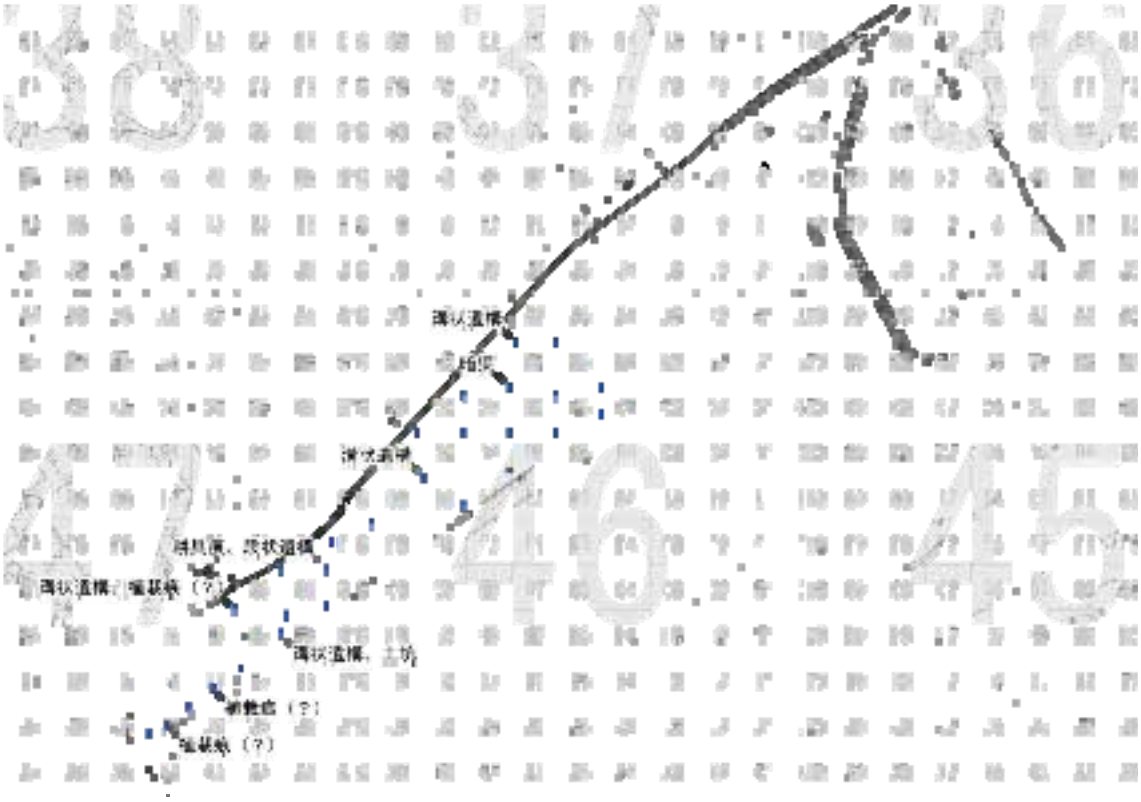
５　今後の計画

普天間飛行場内において、現時点で調査可能な範囲での試掘調査は終了したため、今年度から本格的な確認調査へと移行する。また、これまでの試掘調査の成果について再度整理を行い、宜野湾市教育委員会と協力しながら、遺跡の範囲等について検討を進めている最中である。

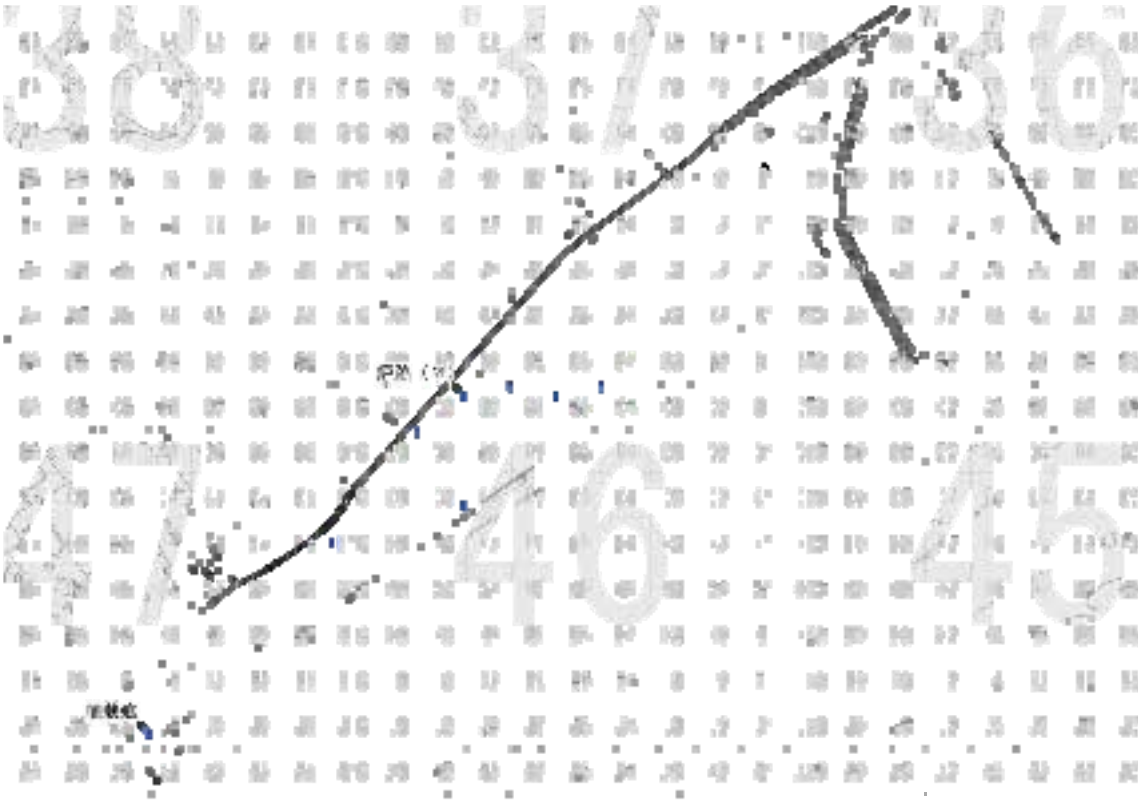
第１図　平成 20 年度調査範囲



第２図　試掘・確認調査箇所



第３図　耕作関連土層と遺構の分布（近世～近代）



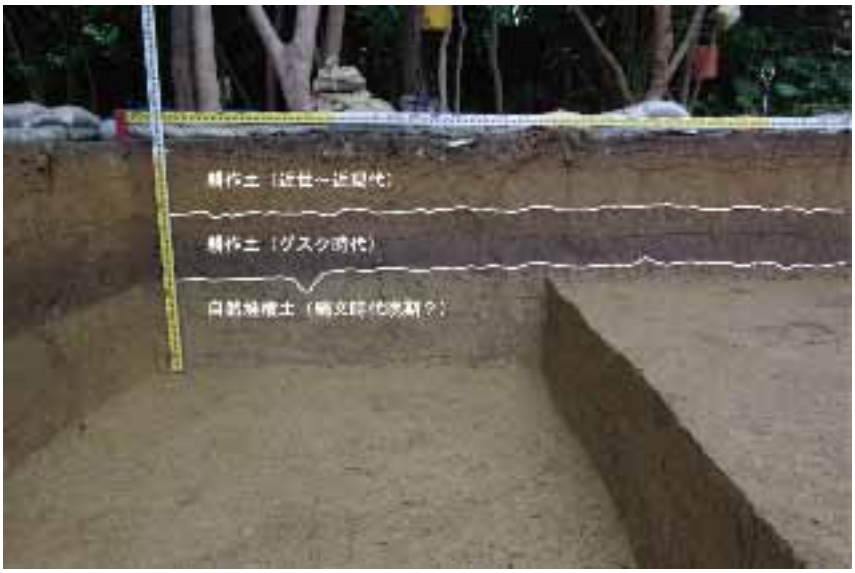
第４図　耕作関連土層と遺構の分布（グスク時代まで遡る可能性がある地点）

図版１　重機による掘削

図版２　耕作関連遺構検出状況（近世～近代）

図版３　地表下４ｍの壁面で確認された炉跡（グスク時代？）

図版４　植栽痕検出状況（グスク時代？）



図版５　堆積の様子（フテ 36- F トレンチ）

図版６　耕作関連遺構検出状況（フテ 36- G トレンチ）

普天間古集落遺跡

調査班　主任　知念 隆博

1　調査期間：平成 20 年 7 月 22 日～平成 21 年 3 月 31 日

2　調査面積：約 12,500 ㎡

3　検出遺構：
〇近世から近代：道跡、溝跡、井戸、方形石組遺構、窯跡、炉跡、水場遺構、畑跡（耕作地）、石敷遺構、ピットなど
〇グスク時代、縄文時代晩期：ピット、土坑など

4　出土遺物
〇近世以降：沖縄産陶器、中国産陶磁器、本土産陶磁器など
〇グスク時代：中国産陶磁器、土器など
〇縄文時代晩期：石器、土器など

5　時代別の概要
〇近世から近代：方形石組遺構や井戸などの普天間古集落に関連する遺構及び普天間古集落に付随していたと考えられる畑跡（耕作地）を検出している。また、道跡や溝跡も検出している。

〇グスク時代：遺構としてはピットが主となり、遺物は中国産陶磁器、土器などのグスク時代のものが少数確認されている。

〇縄文時代晩期：ピットが主となっており、その他に土坑などが確認されている。

調査範囲図

写真１　獣骨検出状況

写真２　列状ピット群完掘状況

沖縄県立埋蔵文化財センター
行事案内

◎ ８月８日（土）午前の部 9：00 ～ 12：00　午後の部　13：00 ～ 16：00
体験学習 「原始人の技 アクセサリー作り」

◎ ８月 22 日（土）　13：30 ～ 16：30
第 34 回文化講座「海に眠る琉球王国の歴史 ～沖縄県の水中文化遺産～」
・「文化財保護法と水中遺跡」　文化庁調査官 清野 孝之
・「日本の水中文化遺産と海底遺跡ミュージアム構想」　有田町歴史資料館　野上 建紀
・「沖縄県の水中文化遺産」　当センター　片桐 千亜紀

◎ ９月 29 日（火）～ 11 月 8 日（日）
企画展 「考古資料にみる日本・沖縄」

◎ 10 月３日（土）
第 35 回文化講座
「江戸時代の陶磁器からみた薩摩と琉球」 講師：渡辺芳郎（鹿児島大学教授）

◎ 1 月 23 日（土）～２月７日（日）
企画展 「重要文化財公開　首里城京の内跡出土品展」
～土でつくられた緑の宝石(その２)～

◎ 1 月 23 日（土）
第 36 回文化講座
「明代の朝貢体制 - 東アジアの国際秩序 - 」 講師：檀上 寛（京都女子大学教授）

※行事予定は変更する場合がありますので、開催前に HP 等で詳細情報をご確認ください。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193 番地の 7

Tel：098-835-8752　　FAX：098-835-8754

HP ：http://www.maizou-okinawa.gr.jp/